英国サフォーク州サットン・フーをめぐる景観管理の文化地理学

――1990年代以降のナショナル・トラストによる文化遺産展示の思想と実践――

Cultural Geography of Managing Landscapes in Sutton Hoo, Suffolk: ideas and practices of displaying cultural heritage by the National Trust after 1990s

橘　セツ

キーワード： サットン・フー、ナショナル・トラスト、イースト・アングリア、アングロ・サクソン、船葬墓、エディス・プリティ（1883－1942）

Key Words: Sutton Hoo, National Trust, East Anglia, Anglo Saxon, ship burial, Edith Pretty (1883-1942)

要　旨

英国サフォーク州のデベン川流域の高台にあるサットン・フーは、エディス・プリティ（1883－1942）が1926年から1942年まで所有・居住した地所である。その敷地には、いくつもの塚があった。エディスは、これらの塚群に興味を持ち私費で発掘調査した。1939年夏、そこから７世紀のものと考証されるアングロ・サクソンの船葬墓と数々の副葬品が出土した。これらは歴史の見方を変えるような大発見となった。しかしながら1939年９月に第二次世界大戦がはじまり墓は埋め戻された。エディスも1942年に亡くなり、サットン・フーの所有者も変遷した。ナショナル・トラストは1998年にサットン・フーを当時の所有者から遺贈され、所有することとなった。それ以降、ナショナル・トラストはサットン・フーの公開にあたって文化遺産や景観の展示には、様々なレベルでの復元・複製を施した。ナショナル・トラストでは、どのような方法でサットン・フーの文化遺産と景観を管理し、公開し、広報し、展示しているのか本稿ではその思想と実践をめぐる文化地理学について紹介する。

Ⅰ．はじめに

ⅰ）サットン・フーとナショナル・トラスト

英国サフォーク州にあるサットン・フーは、エディス・プリティ（1883－1942）が1926年から1942年まで所有し、居住した農場地所である。その敷地には、小山状の塚が集まっているエリアがあった。エディスは、これらの塚に興味を持ち発掘調査を依頼した。1939年夏、そこから７世紀のものと考証されるアングロ･サクソンの船葬墓と数々の副葬品が出土した。これらは、

歴史の見方を変えるような大発見となった（National Trust 2014: 6）。

サットン・フーは、英国の歴史的名所や自然的景勝地を保全するために1895年に設立された団体ナショナル・トラスト（National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty）が1998年に新しく獲得した文化遺産である（National Trust 2018）。

ナショナル・トラストが刊行する2018年度版のハンドブックでは、サットン・フーをどのように紹介しているのかみてみよう。ハンドブックのサットン・フーのエントリーでは、次のように記述されている。

> Shortly before the outbreak of the Second World War, the ship burial of an Anglo-Saxon king and his extraordinary treasures were unearthed by archaeologist Basil Brown. These ancient graves kept their secrets for 1,300 years, but what was found here changed our perceptions of the past for ever. The atmospheric burial mounds, breathtaking replica treasures and reconstruction of the king's burial chamber bring this fascinating story to life. Edith Pretty's country house takes you back to that remarkable discovery, while relaxing in true 1930s style. Various walks across this Anglo-Saxon landscape offer impressive views over the River Deben. (National Trust 2018: 234-235)

以上の記述の要点をまとめると次のようになる：

a）第二次世界大戦開戦直前の1939年の夏、考古学者バジル・ブラウンの尽力によって、アングロ・サクソン王の船葬墓と宝物が発掘された。

b）これらの埋葬塚は1300年ものあいだ誰にも知られず秘められていたが、この発掘による発見物によって、アングロ・サクソン時代の過去への私たちの認識が永遠にあらためられた。

c）雰囲気のある埋葬塚の小山、出土した宝物の複製品 replica、王の埋葬室を復元 reconstruction した展示は、この魅力ある物語に生命を吹き込む bring this fascinating story to life。

d）エディス・プリティのカントリー・ハウスでは、くつろいだ雰囲気のほんものの1930年代のスタイル true 1930s style を復元したので、すばらしい発見をした時代にあなたは連れ戻される。

e）アングロ・サクソンの埋葬塚の景観を横断する様々な遊歩道では、デベン川を見下ろす印象的な眺めをあなたは体験できる。

以上の解説が示すのは、現在のサットン・フーをめぐる文化遺産や景観の展示には、様々なレベルでの復元・複製がナショナル・トラストによって施されていることである。

ナショナル・トラストがサットン・フーを1998年に獲得して以降、どのような方法でサットン・フーの文化遺産と景観を管理し、公開し、広報し、展示しているのか本稿ではその思想と

実践をめぐる文化地理学について紹介する。

ⅱ）サットン・フーの景観の文化地理的文脈

サフォーク州はイングランド東部イースト・アングリア地方に位置し、東の海岸線は北海に面している。サットン・フーは、サフォークの海岸線から約12キロメートル内陸のデベン川流域の町ウッドブリッジの近郊に位置する（図１）。

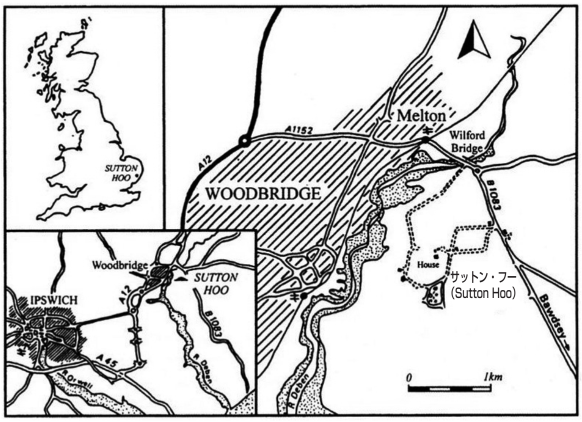

図１　サットン・フー（Sutton Hoo）の位置
（出 典：Martin Carver (2017) *The Sutton Hoo Story: Encounters with Early England.* The Boydell Press. p.vii）

北海に注ぐデベン川は、三角江（エスチュアリー）を形成し、潮の干満によって流れができる。満潮時に河口から上げ潮に乗って船が川を上流に遡ぼることができるために、デベン川は内陸に河川の港を築くことができ、海運に有利な地形である。デベン川の三角江から上流に12キロメートル程度さかのぼったところの高台にサットン・フーは位置する（図２）。

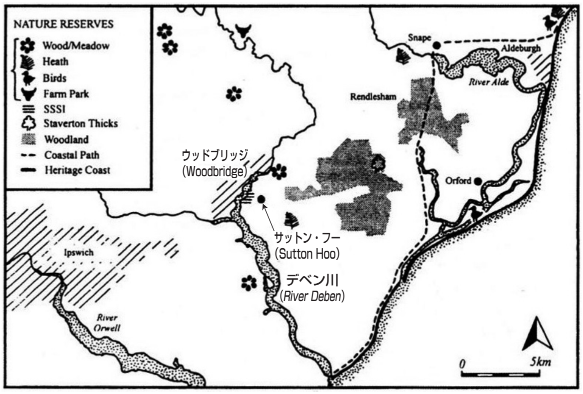

図２　サットン・フー（Sutton Hoo）の位置
（出 典：Martin Carver (2017) *The Sutton Hoo Story: Encounters with Early England.* The Boydell Press. p.vii）

地名サットン・フー Sutton Hoo の hoo という単語は、古英語で丘の山脚 a spur of a hill、高地・高台 a high plateau との意味であり、全体的にみると平らな土地が広がるイースト・アングリア地方では際立った地形であった（National Trust 2014: 6）。

サットン・フーは、「顕著な自然美がみられる地域 ‘Area of Outstanding Natural Beauty’（AONB）」に1969年に指定されている「サフォークの海岸とヒース‘Suffolk Coast and Heaths’」に含まれる（http://www.landscapesforlife.org.uk/about-aonbs/visit-aonbs/suffolk-coast-and-heaths-aonb/）。Tom Williamson（2005）によると「サフォークの海岸とヒース ‘Suffolk Coast and Heaths’」は、AONB に指定される以前から、Sandlings あるいは Sandlands と呼ばれて、砂地に自然美の認められる景勝地であった（Williamson 2005）。図２に示される通り、森林／牧草地 Wood/Meadow、ヒース Heath、鳥 Birds、ファーム・パーク Farm Park などに関するネイチャー・リザーブが点在する中にサットン・フーも位置する。

ⅲ）ナショナル・トラストの広報するサットン・フーの文化遺産と景観

サットン・フーを訪れると、「宝物と王たちの物語 Tales of treasure and kings」と題するナショナル・トラストのリーフレットが入口で来場者に配られる（図３）。この表紙には、サットン・フーの出土品の顔おおいのついたヘルメットをモチーフとした巨大なモザイク状のアート・オブジェ、動物の角を利用したドリンキング・ホーン、カラフルに彩色された３つの円形盾などアングロ・サクソンの王の墓から出土した副葬品の現代的な複製品、アングロ・サクソン王の船葬墓が発掘された埋葬塚ごしに見えるサットン・フー・ハウス（現在は遺贈者を記念して Tranmer House）の図像が描かれている。これらの図像の下には「サットン・フーへようこそ Welcome to Sutton Hoo」と記され、続いて見学の３つのハイライトが具体的に示される：「アングロ・サクソンの王たちの埋葬塚を探索する、プリティ夫人の穏やかな家でくつろぐ、美しいカントリーサイドを散歩してこの古代の風景とデベン川の素晴らしい眺めを堪能する」（National Trust, 2018）。

このリーフレットと地図にしたがって、私たちもサッ

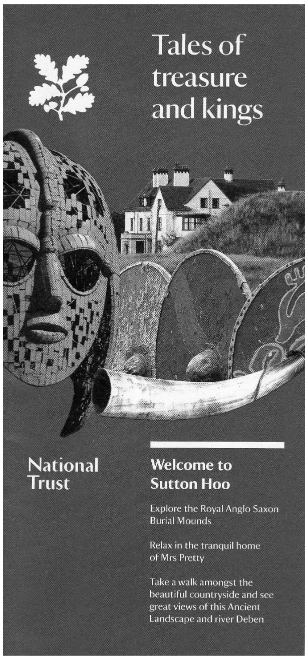

図３　サットン・フーに入場すると入口で配布されるナショナル・トラストによるリーフレット

（National Trust 2018）

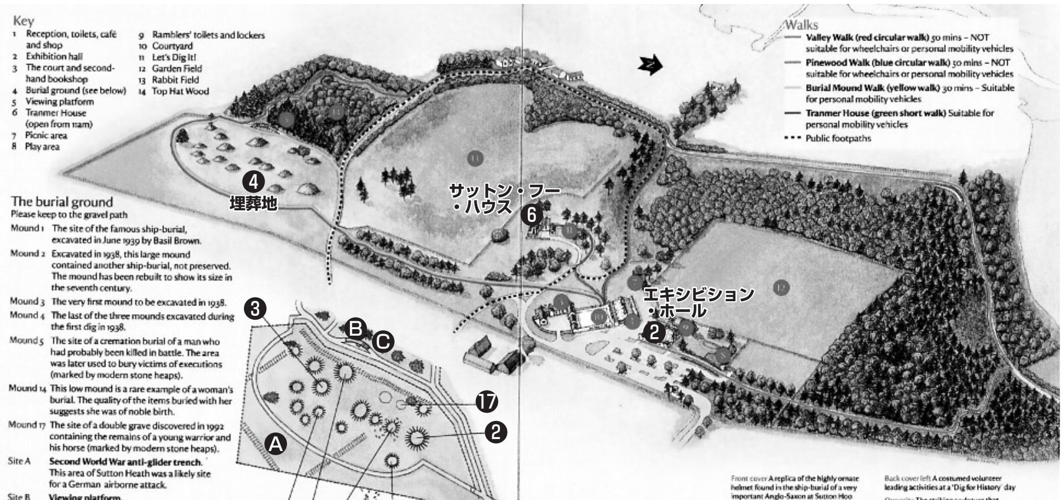

図４　ナショナル・トラストによるサットン・フーのパンフレットに掲載されている地図

（National Trust 2014）

トン・フーを見学することにしよう。Ⅱ章では、駐車場からの入口に一番近いところにあるエキシビション・ホール（図４の２）、Ⅲ章ではエディス・プリティの家であるサットン・フー・ハウス（現在は Tranmer House、図４の６）、Ⅳ章では野外の大小17の埋葬塚群のある区画（図４の４）と遊歩道という主に３つのエリアを本稿では紹介する。さらに、Ｖ章では、2018年限定で英国の女性参政権獲得百周年を記念して行われた展示を紹介する。

Ⅱ．エキシビション・ホールでの複製と復元：イースト・アングリアのアングロ・サクソン時代を展示する

エキシビション・ホールの入口の上には、サットン・フー・ヘルメットをモチーフとした大きなモザイク状のアート・オブジェが飾られ、来場者を迎えてくれる（図５）。来場者は、まず、入口のそばで、サットン・フーの歴史についてのショートフィルムを見て基本知識を学習する。次に見るのは、埋葬塚からの発掘出土品（主としてレプリカ）の展示である。展示ケースの中には、副葬品として船葬墓の中から出土した金の装飾が施された円形盾、槍、斧や顔おおいのついたヘルメットのような武具や銀器、コイン、ボタン、金、銀、銅、鉄でできたベルトのバックルなどの装身具の断片と、復元を試みたきらびやかなレプリカが展示される。コインは、フランク王国メロビング朝時代につくられたものであり、墓から37枚が発見された。これらのコ

図５　エキシビション・ホールの入り口に掲げられるサットン・フーの顔おおいのついたヘルメットのオブジェ
（2018年７月 筆者撮影）

図６　教材としての顔おおいのついたヘルメットのレプリカをかぶってアングロ・サクソン時代のサットン・フーを体験学習する子ども。ヘルメットには写真のような精巧な金銀細工の装飾が施されていたことが考証されている
（エキシビション・ホールの中にて 2018年７月 筆者撮影）

インの中で、一番新しいのは620年から625年の間に製造されたことが考証されている。牡鹿の飾りのついた王権を示す王笏も墓から出土し、レプリカが展示される。もっとも有名な出土品の顔おおいのついたヘルメット The Sutton Hoo Helmet の本物の断片は、ロンドンにあるブリティッシュ・ミュージアム British Museum の41室 Room41 に「サットン・フーの船葬墓 紀元600年代初期 The Sutton Hoo ship burial Early AD 600s」のタイトルのもと展示されている（図７）ので、サットン・フーにあるのは複製品である。エキシビション・ホールの中には、子どもが体験学習として身につけられるようなレプリカの顔おおいのついたヘルメットも用意されている（図６）。

図７　サットン・フーの出土品の顔おおいのついたヘルメット（出土した本物の断片をはりあわせ足りない部分についても考証したもの）が展示されるロンドンにあるブリティッシュ・ミュージアム第41室

（2015年３月　筆者撮影）

エキシビション・ホールの中心には、アングロ・サクソン王の船の中の埋葬室を復元している。今まさに王が亡くなり、埋葬される場面が蝋人形で復元展示されている。眠る王の周りには円形盾や槍や顔おおいのついたヘルメットのような武具や銀皿、装身具などの当時の王の日用品が副葬品として埋葬されている。解説によると、サットン・フーで発掘された船葬墓の埋葬室の大きさは、5.5メートル×4.5メートル四方の大きさであった。埋葬された王は、紀元６－７世紀にイースト・アングリア地方で力を持っていたウィッフィング王朝 the Wuffing dynasty のレッドウォールド王 King Raedwald（AD599-c.625）である可能性が高いと考証されている。彼らは、どのような人々で、どのような王国を築いたと考えられているのであろうか。

イギリス諸島では、ローマ人の支配は410年頃には終わりを迎えた。ローマ人が支配していた時代には、ローマ人のつくったローマ風の都市やヴィラの文化をローマ人もイギリス諸島の人々も享受していたが、ローマ支配の終焉とともにローマに影響を受けた文化の隆盛は終わった。英国史の教科書では、ローマ人の支配が終わる５世紀頃から1066年の「ノルマン征服 Norman Conquest」までが、いわゆる「アングロ・サクソン時代」とされる。５世紀頃から、イギリス諸島に海から船に乗ってやってきて定住したのがゲルマン系の言語を話すアングル人、サクソン人、ジュート人などの諸集団とされる。アングロ・サクソン人という民族がもともと存在していたわけではなく、様々な出自を持つイギリス諸島に移動してきたゲルマン系諸集団を後世の歴史家がアングロ・サクソン人として概念化させ、創造／想像したという側面がある（Leyser, 2017など）。

やがて、彼らは農業を基盤とするコミュニティを形成し、王国をつくって活躍した。アングロ・サクソン人たちが、イギリス諸島に先住していたブリトン人を西へ追いやり、６世紀の終

わり頃から彼らは各地に大小数十のアングロ・サクソンの王国を形成し、分立しせめぎあった。近世の歴史家はその中でも特に有力な王国を選んで「七王国」(ケント、イースト・アングリア、ノーサンブリア、マーシア、エセックス、サセックス、ウェセックス)とした。サットン・フーに埋葬された可能性のあるウィッフィング王朝のレッドウォールド王(AD599-c.625)が率いるイースト・アングリア王国も、この「七王国」に含まれる。

彼らは、船をつくり航海する高い技術を持ち、北海を中心に、北欧を拠点とするヴァイキングと戦い、時には交流し交易圏を形成していた。7世紀末までに、アングロ・サクソンの王たちは、キリスト教を受け入れ、やがて「七王国」のひとつウェセックス王アルフレッド(在位871－899)がアングロ・サクソンの王国を統一した(Leyser, 2017など)。

1066年に「ノルマンの征服 Norman Conquest」によって、イギリス諸島がフランス語を話す支配者に征服されるまでは、イギリス諸島はアングロ・サクソン人が活躍する時代であったとされるが、アングロ・サクソン人の社会について当時は詳しい実像は実証されておらず、わからないことも多かった。

サットン・フーで発掘された7世紀のアングロ・サクソン王の船葬墓からの出土品が示すのは、イースト・アングリア地方のアングロ・サクソン人たちが、高い洗練された技術を持ち、高度に発達した社会集団としての王国を形成していたことである。サットン・フーでの1939年の発掘の成果は、20世紀に生きる英国人のアングロ・サクソン社会への見方を変え、歴史を書き換えるのに十分な発見だとされる(National Trust 2014他)。

さらに20世紀に生きる英国人たちを驚かせたのは、このサットン・フーの船葬墓と副葬品が、アングロ・サクソン時代に成立した叙事詩『ベーオウルフ *Beowulf*』で描かれた世界と類似していたことである。エキシビション・ホールでは、『ベーオウルフ』の世界観について丁寧に展示している。叙事詩『ベーオウルフ』とは、今のスウェーデン南東部のイエアト族の勇士ベーオウルフが、怪物グレンデルに苦しめられているデネ(今のデンマーク)の人々を助けるために怪物を退治する英雄譚である。『ベーオウルフ』の作者は不明であるが、世代を超えて叙事詩は口伝で語られ続け、子孫に伝えられた。『ベーオウルフ』は、もともとスカンジナヴィア半島が舞台となっている英雄叙事詩であるが、スカンジナヴィア半島からイギリス諸島にアングロ・サクソン人が移動した時にともに持ち込まれ、古英語の文学として成立したとされる。『ベーオウルフ』には、デネの王が亡くなった時に、王の亡骸を数々の副葬品と

図8　サットン・フーに復元されたアングロ・サクソン時代の木造船。展示解説によると実験考古学として実際に北海で航行するプロジェクトのため建造された。発掘された船葬墓で使用された船と同じタイプだと考証される。

(2018年7月 筆者撮影)

ともに船に埋葬して海に流して葬送する場面が描かれている。また、『ベーオウルフ』には英雄ベーオウルフの持ち物としてサットン・フーで副葬品として出土したような顔おおいのついたヘルメットや槍や円形盾などが描かれている（エキシビション・ホールの展示解説；National Trust 2014; Leyser, 2017; 桜井 2010；吉見 2018など）。

Ⅲ．サットン・フー・ハウス（現在は Tranmer House）のエディス・プリティの生活した1930年代のスタイルへの復元と場所の記憶の語り

サットン・フー・ハウスは、ロイヤル・アカデミーの芸術家でジェントルマンの John Chadwick Lomax が自宅兼狩りの時に使用するシューティング・ロッジとして1910年に建造したエドワーディアン・スタイルの邸宅である。しかしながら1925年にサットン・フーは売りに出された。そこで、エディス（1883－1942）とフランク・プリティは結婚を契機に、かれらがサットン・フー・ハウスを1926年に15,250ポンドで購入し、居住をはじめた。サットン・フーは、526エーカーの農場地所である（National Trust 2014）。

サットン・フー・ハウスは、現在まで４人のオーナーによって所有されてきた歴史がある。まず1910年に新築として建築した John and Hester Lomax、次に本稿の中心人物であるエディスとフランク・プリティ、その後 John and Molly Barton を経て、Leslie and Annie Tranmer が所有した。最終的にサットン・フー・ハウスは1998年に Annie Tranmer 財団からナショナル・トラストに寄贈された。エディス・プリティの生活していた頃は、家はサットン・フー・ハウスと呼ばれていたが、現在は、家をナショナル・トラストへ遺贈してくれた Annie Tranmer を記念して Tranmer House と名付け直されている。

家の中に入ってみよう。部屋に置いてあるナショナル・トラストのガイドノーツ Guide Notes によると、エディスとフランクがサットン・フーを購入したときのセールス・カタログの写真を参考にしながら、サットン・フー・ハウスの部屋は、エディス・プリティと家族が生活していた1930年代のスタイルで統一して復元展示しているという。ガイドノーツでは来場者を歓迎して次のように語りかけている：

> どうぞ気軽にすわって、この雰囲気に浸って、本や雑誌を読んで、あなた自身を1930年代の過去に移動させてください。Feel free to sit down and soak up the ambience, read the books and magazines and transport yourself back in time to the 1930s (National Trust 2018).

続いて、ガイドノーツには、ナショナル・トラストの解説員たちが各部屋に常駐していて、エディス・プリティとこの家の歴史について解説員の語りを来場者が聞きたければ聞くことができ、何か質問があれば尋ねることができると記されている。さらに、部屋にある1860年製のピアノも弾くことができるので、どうぞ部屋にいる解説員に尋ねて下さいとある。この部屋の展示方法は、2010年代にナショナル・トラストの方針のひとつとして示されている方法である。

それは展示を通して「場所に生命を吹き込むBringing places to life」哲学である（National Trust 2011; 橘 2015: 18)。この「場所に生命を吹き込む」哲学がサットン・フーの展示でも実践され活かされている。

家の中には、エディス・プリティとその家族の肖像画や写真が飾られ、来場者は、エディス・プリティの生活の記憶と彼女のライフヒストリーを追憶して見学することができる。

応接間の暖炉の上に掲げられているのは、エディス・プリティの肖像画である（図９)。この肖像画はエディスの孫からナショナル・トラストに寄贈され、現在ここに飾られている。この肖像画はオランダの画家Cor Visserが、1939年に描いた。エディスは、その時56歳であった。ナショナル・トラストのガイドブックによると、このエディスの肖像画について「とても疲れていているように見え、何だかメランコリックな表情をたたえている女性」だと評されている（National Trust 2014: 11)。

図９　サットン・フー・ハウス（現在のTranmer House）の応接間 the Drawing Room の暖炉の上に飾られるエディス・プリティの肖像画と1942年から宿舎となった女性農耕部隊の制服の展示
（2018年７月 筆者撮影）

彼女が、埋葬塚の発掘をめぐる大発見のきっかけをつくる1939年に至るまで、どのような人生を歩んだのかライフヒストリーを振り返ってみよう。

エディス・プリティ（旧姓Dempster）は、1883年に、裕福な家に生まれた。彼女の祖父と父は、ガス供給関連の工場R&J Dempsterを立ち上げて、経営して、大きな財産を築いた。エディスには、妹のエリザベスがいた。青春時代、エディスは、妹エリザベスとともに学んでいた寄宿学校Roedean School near Brightonで仲が良い友人ミリーMillieの兄フランク・プリティに、テニスのパーティのときにであった。エディスとフランクは恋に落ち、エディスが18歳の誕生日にフランクはプロポーズしたという話が家族では伝えられている。しかしながら、エディスの両親は、エディスをもっと上流階級に嫁がせたいと考えていたので反対した。フランク・プリティの家は、女性用コルセットと靴下などの下着類をつくる産業を起業し工場William Pretty and Sons of Ipswichを経営しており裕福であった。エディスは、その後の24年間、イングランド北部のチェシャーにある両親の家the Vale Royal Estate in Cheshireにとどまり生活した。彼女は、フットワークが軽く、旅行が大好きで、両親と、そして母が亡くなった後は、父親と世界中を多く旅行してまわった。いつでも旅行に出発できるように彼女はスーツケースを用意して手元に置いていたと伝えられる。その間も、フランクは毎年エディスの誕生日にプロポーズし続けたと家族の中では伝えられる。第一次世界大戦中は、フランクはサフォーク連隊Suffolk

Regimentに従軍しソンヌなど激戦地で戦い、エディスは赤十字関係で奉仕活動をした。

エディスとフランクがようやく結婚することになったのは、エディスの父親が1925年４月に南アフリカでホリデーを過ごしている時に亡くなった後である。彼らが結婚したとき、エディスは42歳、フランクは47歳になっていた。エディスは、裕福な父親から、今後豊かに生活できるじゅうぶんな遺産を引き継いだ。彼らは、当時、売りに出ていたサットン・フーを購入し、1926年からサットン・フーで新婚生活を始めた。フランクは家族経営のコルセット工場のビジネスに関わり、エディスも地方の判事の役をつとめ、裕福な名士としてチャリティなどの社会的な役割を担い充実していた。フランクもエディスも地主として狩りの季節にはEssex and Suffolk Huntの熱心なメンバーとして狩猟に加わり、多くの友人を家に招いて、もてなすといった賑やかな社交生活を楽しんだ（National Trust 2014）。

エディスは結婚４年後、彼女が47歳の時に、息子ロバートを授かり、幸せであった。しかしながら、1934年12月28日、夫フランクは56歳の誕生日の日に癌で亡くなってしまった。その時、息子のロバートはまだ４歳であった。エディスとフランクのサットン・フーでの幸せな結婚生活はわずか８年で終了した。

敷地にある埋葬塚群については、墓の中には金銀財宝が埋まっている、あるいは昔の兵士たちが今でもさまよっているのを見たなどとの噂がサットン・フーの地元の村では昔からささやかれ続けた。エディスのライフヒストリーについて文献を読むと、エディスが、夫フランクの死後、サットン・フーの敷地にある古い埋葬塚群に興味を示し、具体的に行動を開始するようになる契機やプロセスについての語りが２種類ある。

ひとつは、エディスの妹の紹介で友人となり、度々サットン・フーを訪れるようになったスピリチュアリストのヒーラー（治療者）たちとの交流の影響とする語りである。1930年代の英国では、スピリチュアリストによるヒーリングや降霊術が人々の間に広く受け入れられていたという背景があった（オッペンハイム 1992など）。ナショナル・トラストのガイドブックにはそのプロセスが、次のように語られる：

> フランクが病気療養中、エディスの妹エリザベスは、ハンプシャーにある自宅から、通ってきてエディス一家を助け、サポートした。エディスも黄疸の症状で苦しんでおり具合が最悪の時には、末期の癌を患っている夫よりももっと弱っているようにみえた。そこで、エリザベスはスピリチュアリストのヒーラー（治療者）ウィリアム・パリッシュWilliam Parishに連絡を取ってヒーリングによる治療を依頼した。ウィリアムは、初めは遠隔から治療を施し、徐々にサットン・フー・ハウスを訪れて治療を行うようになった。おかげでエディスは、しばらくして具合が好転した。
>
> ウィリアムと彼の妻ペギーはエディスと親しい友人となった。ウィリアム・パリッシュ夫妻の影響で、エディスは草に覆われた埋葬塚に明らかに関心を持つようになり、中に何があるのか発掘して調べてみたいと思うようになったのであろう。スピリチュアリストの他の友人がサットン・フー・ハウスに滞在した時に、埋葬塚のあたりで亡霊の

ような昔の兵士のかたちを見たと、エディスに語った。この埋葬塚は、昔から地元の伝説や埋められた宝物について話の題材となってきた場所であった（National Trust 2014: 10；訳は筆者による）。

これに対して、もういっぽうの語りは、このようなスピリチュアリストの言説からは距離を置く立場だ。例えばブリティッシュ・ミュージアムのサットン・フー・ヘルメットについての解説書では、エディスの発掘への興味の源として、スピリチュアリストの影響によることは一切語られていない。エディスは子どもの時から家族、特に父親とともに世界を幅広く旅行し教養を身につけた。エディスはエジプトやギリシャなどの古代遺跡に強く興味を持っていた。ブリティッシュ・ミュージアムのサットン・フー・ヘルメットについての解説書 *The Sutton Hoo Helmet: British Museum Objects in Focus* では、エディスは、若いころに抱いた古代遺跡へのあこがれと興味を再び取り戻して、発掘を模索し、着手したと語られる（Marzinzik 2007: 9）。

1937年までに家族や友人たちの助けでなんとか夫の喪失を耐えられるようになったエディスは、家の窓から眺めることもできる古い埋葬塚に対する彼女の興味・関心に対して具体的に行動を開始した。彼女は地元の歴史家 Vincent Redstone を通じて、近くの都市イプスウィッチにある博物館の学芸員 Guy Maynard に相談した。彼女はイプスウィッチ博物館から紹介された地元のアマチュア考古学者バジル・ブラウン Basil Brown を1938年６月から雇うことにし、私費で発掘を依頼した。バジル・ブラウンは、エディスの地所の常雇いの労働者ゲームキーパーと庭師のふたりとともに、1938年に塚番号３・２・４（図４参照）の発掘を始めた。２年目の1939年６月、塚番号１（図４参照）から、彼らは、27メートルもの長さの船葬墓を発見・発掘し、副葬品などの宝物が出土した。ケンブリッジ大学の教授やブリティッシュ・ミュージアムからも専門家が来訪し、サットン・フーの発掘に加わり、世紀の大発見と報道された。

1939年８月14日に行われたサットン村の陪審では、船葬墓からの出土品は、エディス・プリティの所有となることが正式に決定された。新聞では「時価30,000ポンドに相当するサクソン王の宝物」と報道された（National Trust 2014）。その１週間後に、エディスは、出土品の全てを国に寄贈すると発表した。出土品は、ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムに運ばれ、学術研究に基づいた復元作業に向けて安全に保存されることになった。墓は慌ただしく埋め戻され、1939年９月３日に第二次世界大戦が始まった。

エディス・プリティは1942年に息を引き取った。残された当時12歳の息子ロバートは、エディスの妹エリザベスに引き取られ、それまで育った家サットン・フー・ハウスを離れた。

第二次世界大戦中は、空からの攻撃の目印になるのを避けるためにサットン・フーの埋葬塚のある周辺には、溝が掘られた（図４参照 SiteA）。

第二次世界大戦中には、女性農耕部隊 Women’s Land Army が英国の村落にひろく派遣され、地域の農業労働支援に携わった（橘 2017など）。1942年以降は、サットン・フー・ハウスは、女性農耕部隊の宿舎の役割を果たしており、多くの女性部隊員 Land Girls たちが寄宿していた。部屋にあるガイドノーツによると「家にはもともとベッドルームが20部屋あり、60人までの女

性農耕部隊員が滞在していたという記録がある」(National Trust 2018)。現在、応接間 the Drawing Room には、この事実を記念して女性農耕部隊のグリーン色の制服が暖炉のそばに飾られ、展示されている（図９)。女性農耕部隊の宿舎時代のエピソードはその記憶の痕跡が残る場所を目の前にしたナショナル・トラストの解説員から次のように語られる：

「暖炉のマントルピースの白っぽい大理石の台と枠の右手には、女性農耕部隊の何人かの女子たちが自分の名前とおそらくは好きな人の名前を彫り込んだ記念の落書きが現在も残っている（図９参照)。」「(同じ部屋の別の壁）女性農耕部隊の女子たちは休憩時間にダーツゲームを楽しんだ。ダーツゲームの的となる点数板の周囲のオーク・パネルの壁に打ち損じのダーツの羽根の矢がつき刺さってできた無数の小さな穴が見られる。」（ナショナル・トラストの解説員から筆者の聴き取り2018年７月24日）

以上に紹介したように、女性農耕部隊滞在の記憶の痕跡も現在のサットン・フー・ハウスの部屋には残されていて、ナショナル・トラストによって展示・解説されている。

Ⅳ．野外の埋葬地における復元と展示

サットン・フーにあるイースト・アングリアの王族の埋葬地の塚群（図４参照）の発掘のプロセスは、ナショナル・トラストが示す年表 (National Trust 2014) によると次のようにまとめられる：

1900年代以前：チューダー朝時代の墓泥棒によって暴かれた。彼らは、墓の発掘調査というより、副葬品を略奪して利益をむさぼった。エリザベスⅠ世も、発掘許可を与えて、利益を共有した。

1938－39年：バジル・ブラウンが、1938年に塚３、２、４を発掘。1939年６月に塚１から27メートルものアングロ・サクソン時代の船を発見・発掘する。第二次世界大戦の開戦によって発掘作業は中断する。

1965－70年：ロバート・ブルース－ミットフォードが、再発掘。バジル・ブラウンが発掘した時の土を再調査して、全ての断片を記録した。

1983－93年：マーティン・カーヴァーが王族の埋葬地の範囲を再発掘調査。実験的考古学の成果として塚２を埋め戻す時に、墓が作られた７世紀のオリジナルだと考証された高さに復元した。塚17も発掘した。

2000年：現在は、ナショナル・トラストのカフェ、ビジター・センター、エキシビショ

図10　サットン・フーの埋葬地を眺めるプラットフォームに掲示される解説看板：船葬墓が発見された塚１の正面に位置する

（2018年７月　筆者撮影）

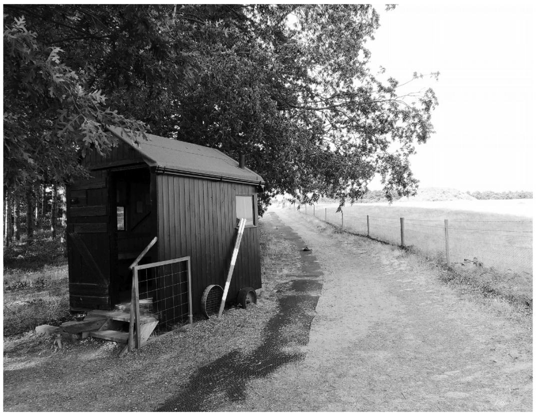

図11　バジル・ブラウンが発掘の拠点とした羊飼い用小屋の復元展示：中は、1939年夏バジル・ブラウンが発掘作業をしている状態を再現し、発掘品やブラウンの手紙や記録の複製が展示されている

（2018年７月　筆者撮影）

ン・ホールの建っているところを、考古学者が調査して「隠れたフー」‘Hidden Hoo’のエリアを発見した（National Trust 2014）。

この年表によると、塚番号２は、1993年の発掘終了時に、塚を埋め戻す時、考古学的考証に基づいて、墓が建造された７世紀にそうであったと考えられている高さに、実験的に復元されたものであることが理解できる。したがって、現在見ることのできる17つの埋葬塚が点在するエリアで、際立って印象的な高さの塚２のある景観は、1993年の復元以降にあらたに出現したことになる（図12）。これは1939年の発掘の頃には、エディス・プリティもバジル・ブラウンも目にすることのできなかった新たに復元された景観である。また、1939年６月に船葬墓が発掘・発見され豊富な副葬品で注目を集めた塚１は、墓の建造された７世紀には、塚２よりも高く大きかったと考証されたが、そのようなオリジナルの高さに現在は復元されていないので、塚２よりも低く、比較すると目立たない。しかしながら、塚１を目の前でよく眺められる位置（図４のＢ）に見学用のヴューイング・プラットフォームと看板が設置されている（図10）。

見学用のプラットフォームと遊歩道を隔てて反対側の遊歩道沿い（図４のＣ）には、バジル・ブラウンの発掘作業の拠点とした羊飼い用小屋が復元展示されている。小屋の中には、1939年夏バジル・ブラウンが発掘作業をしていた時の状態を再現し、発掘品やブラウンの手紙や記録（複製）が展示されている（図11）。

高台に位置するサットン・フーの埋葬地の遊歩道からは眼下にデベン川とウッドブリッジの町を見下ろす印象的な眺めが広がる（図13）。発掘された27メートルもの大きさの船葬墓に使用した船は、デベン川からサットン・フーの高台に引き上げられたと考古学者は考証している（Carver 2017; National Trust 2014; Williamson 2008など）。船葬墓に象徴されるように、サットン・フーは内陸の高台に位置するが水景に関わる歴史文化遺産でもある。

図12　1993年に７世紀の高さに復元された塚２（右側）とサットン・フー・ハウス（現在は Tranmer House）を埋葬地の遊歩道から見る
（2018年７月 筆者撮影）

図13　サットン・フーの埋葬地をめぐる遊歩道から見るデベン川流域の眺め
（2018年７月 筆者撮影）

これまで概観したようなサットン・フーでの考古学的発見は、もともとはサットン・フーに住む女地主エディス・プリティによる個人的な好奇心に端を発して、彼女の地所での発掘に費用を負担することのできる財力に支えられて、地元のアマチュアの考古学者バジル・ブラウンの緻密な作業と探究心による協力のおかげによって成し遂げられた。いわば、金持ちの道楽とアマチュアの尽力から導き出された大発見だとも解釈できる。しかしながら、発掘による出土品が人々の歴史の見方を変えるような学術的大発見だと理解されるとバジル・ブラウンのこれまでのアマチュアとしては綿密な発掘作業にも敬意を表しながらも、プロフェッショナルな考古学者たちがケンブリッジ大学やブリティッシュ・ミュージアムから来訪して、発掘の主導権を取ろうとせめぎあった。このあたりの状況は小説 *The Dig* で描かれる文学的題材ともなっている（Preston 2008)。

Ⅴ．2018年に行われた展示 Her Say: Extraordinary Women in Sutton Hoo を見学する

2018年は英国にて国会議員の選挙権が女性にはじめて認められた1918年から数えてちょうど百年目にあたる。20世紀初め頃から英国で女性参政権を求めるサフラジスト（穏健派）やサフラジェット suffragette（戦闘派）などの女性たちの戦いは、1918年の第一次世界大戦終了と同じ年に国会議員の選挙権が、30歳以上の戸主または戸主の妻という限定付きで女性にはじめて認められたことで決着がついた（河村 2006; 佐藤 2017など）。2018年は女性参政権獲得百周年を記念し、女性の戦いと活躍の歴史に注目する展示が英国で数多く開催された。その流れの一つとして、サットン・フーでも女性の活躍を讃える展示 Her Say: Extraordinary Women in Sutton Hoo が2018年３月から９月という期間限定で行なわれた。この Her Say: Extraordinary Women in Sutton Hoo の展示では、サットン・フーに関わる四人の女性に焦点が当てられた。

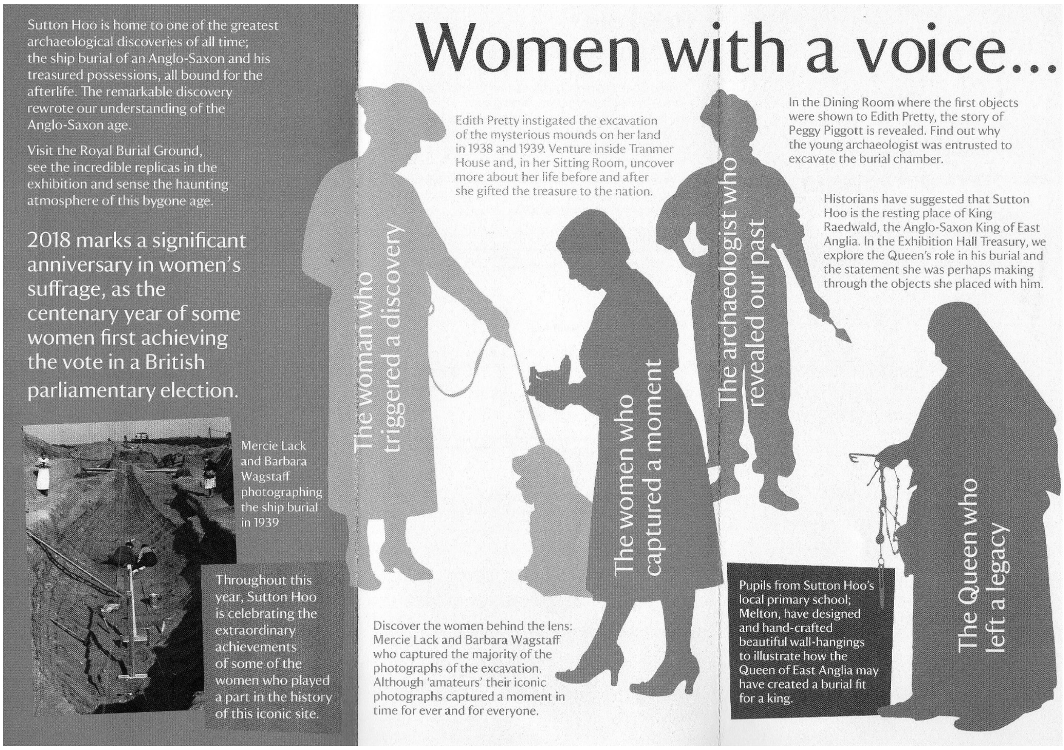

図14　2018年に女性参政権獲得百周年を記念して行われたサットン・フーに関係する４人の女性の活躍を讃える「声を発する女性たち Women with a voice ...」との見出しのリーフレット Her Say: Extraordinary Women in Sutton Hoo

（National Trust 2018）

リーフレットでは見出しとして、見開きのページの上に「声を発する女性たち Women with a voice ...」と記されている（図14）。この「声を発する女性たち Women with a voice ...」とは、誰かに声を代弁してもらう存在ではなく自ら行動し主張し声を持った能動的な女性をサットン・フーの歴史の流れのなかで探求して賞賛するという企画である。

リーフレットの左から順番にどのような女性たちが取り上げられているのかみてみよう。一人目は、先に詳述したようにサットン・フーの発掘を決意・実行したサットン・フー地所の地主エディス・プリティである。リーフレットでは愛犬のリードを持つ彼女のシルエットに白抜きで「発見のきっかけをつくった女性 ‘The woman who triggered a discovery’」と記される。

二組目は、発掘のほとんどの過程を写真で記録したふたりの女性アマチュア・カメラマンのメーシー・ラック Mercie Lack とバーバラ・ワグスタッフ Barbara Wagstaff である。箱型カメラを構えるシルエットに「瞬間を捉えた女性 ‘The women who captured a moment’」との言葉が添えられる。このリーフレットの左下のコーナーには、彼女たちがカメラで撮影した全長27メートルある船葬墓が塚１から姿を現し発掘された過程をとらえた写真が掲げられている。

三人目は、発掘に参加した女性考古学者ペギー・ピゴット Peggy Piggott である。彼女は、のちに離婚・再婚してマーガレット・グイド Margaret Guido としても知られる。彼女は戦後も考

古学者として働き学術的なキャリアを全うした。リーフレットでは発掘で使用するコテを左手に持って、右手を腰に当てて作業着を着てポーズを取っているシルエットに「私たちの過去を明らかにした考古学者 'The archaeologist who revealed our past'」とのフレーズが描かれる。これらの３組の女性たちに関する展示は、サットン・フー・ハウス（現在 Tranmer House）の中で行われた。これらの３組は、すべて1939年のサットン・フーの船葬墓の発掘に関係する女性人物群である。

図15　サットン・フーに７世紀に埋葬されたアングロ・サクソン王の近親者である女王の役割に注目した展示 The Legacy of a Queen：地元の小学生がかかわったアート作品がガラスケースの中に展示される
（2018年７月　筆者撮影）

最後の四人目の女性として、今から1300年あまりも昔のアングロ・サクソン時代にイースト・アングリアの王を船室に埋葬し、豊富な副葬品などの品々を用意して、埋葬に関わったにちがいない女王に焦点が当てられる。リーフレットでは「遺産を残した女王 'The Queen who left a legacy'」の言葉が女王とおぼしき人物のシルエットに記される。

エキシビション・ホールの一角では、サットン・フーに７世紀に埋葬されたアングロ・サクソン王の近親者である女王の役割に注目した「女王の遺産 The Legacy of a Queen」が2018年３月から展示された。地元の小学生がアングロ・サクソンの王の埋葬にたずさわった女王の役割について想像／創造して視覚化した布絵のアート作品が展示される（図15）。また、サットン・フーの墓では副葬品としてアングロ・サクソン時代の宝物が出土したが、現代の小学生が副葬品として墓に埋めるものとしてどのような宝物が考えられるのかという観点で、子どもたちが持ち寄ったのは、ぬいぐるみ、サッカーボール、あるいは家族との写真などであった。それらの小学生の視点からのお気に入りの宝物を「現代の宝物 Modern Treasures」としてガラスケースの中に展示して、副葬品の意味を現代の私たちに実感することのできるアート作品として展示している（https: //www. eadt. co. uk/news/sutton-hoo-her-say-extraordinary-women-exhibitions-launch-1-5414271）。

Ⅵ. おわりに

現代の私たちがサットン・フーを訪問する時には、二つの旅のパースペクティブが含まれる。一つは、サットン・フーの場所を現実に訪れ、ゆかりの土地をめぐる旅である。二つめは、その場所をめぐることによって、過去の出来事に思いをめぐらす時間旅行である。さらにサットン・フーでは、二つの過去の時間に焦点が当てられる。一つは墓に埋葬された人びとが生きていた時代、約1300年前のウィッフィング王朝のレッドウォールド王（AD599-c.625）に代表されるイースト・アングリア王国のアングロ・サクソンの人々が活躍する時代である。二つめの時

代は、エディス・プリティやバジル・ブラウンたちの活躍のおかげで船葬墓が発見された発掘作業が行われた1939年夏である。

1939年にエディス・プリティによって寄贈された出土品のうちの一つサットン・フー・ヘルメットの精巧な復元が完成したのは、1971年11月であり、現在でも図７に示したようにブリティッシュ・ミュージアムに常設展示されている。ブリティッシュ・ミュージアムのサットン・フー・ヘルメットについての解説書 *The Sutton Hoo Helmet: British Museum Objects in Focus* によると、ヘルメットの復元作業は、ピースが完全ではない「巨大なジグソーパズル a gigantic jigsaw puzzle」を組み立てるようだったと語られる。約30年という時間のかかった復元は、同時代のヘルメットの系譜とも比較・考証された考古学の成果であった（Marzinzik 2007）。

復元されたサットン・フーのヘルメットは、金メッキされた青銅と銀の針金でつくられた動物のモチーフが装飾され、眉毛は宝石の付いたドラゴンとなっている印象的なデザインである（図６、７参照）。このサットン・フーのヘルメットの図像は、切手、書籍の表紙、北海の魚の缶詰などにも描かれ（Marzinzik 2007）、現代の英国とアングロ・サクソン時代のつながりを再確認する図像ともなっている。

ブリティッシュ・ミュージアムでは、収蔵物のうち重要な100点を選び、展示解説をした企画展『100のモノが語る世界の歴史 *A History of the World in 100 Objects*』が行われ、サットン・フーの顔おおいのついたヘルメットも100点のうちの一つに選ばれた（マクレガー 2012）。図録では、サットン・フーの顔おおいのついたヘルメットの発見は「近代における考古学上の快挙の一つ」だと評価され、サットン・フーは、「詩と考古学が意図せずして交錯」し英国人のナショナル・アイデンティティの理解を変えた場所だと形容されている（マクレガー 2012: 155-163）。

これまで本稿で紹介したサットン・フーの展示は、2018年９月30日でいったん終了となり閉じられる。過去のナショナル・トラストのハンドブックを調べると、2002年度のハンドブックに2002年３月にサットン・フーの公開を新たに開始すると記されている。さらに2002年のハンドブックの裏表紙には、サットン・フーの埋葬塚が霜に覆われ冬のやわらかな朝日によってドラマチックに輝く写真が ‘New in 2002’ のタイトルのもとで使用されている（National Trust 2002）。ナショナル・トラストは、1998年にサットン・フーを獲得し、2002年３月から2018年９月まで本稿で紹介したような展示を行った。

2019年３月に新たにリニューアルされる展示「サットン・フーの物語をリリースする Releasing the Sutton Hoo story」がオープンする。案内チラシによると、宝くじのヘリテージ基金 Heritage Lottery Fund の支援を受け、サットン・フーの展示は刷新される。展示を閉鎖している間のサットン・フーの展示のリニューアルの準備過程は、ナショナル・トラストのウェブサイトで随時更新され紹介される。戸外の埋葬地のエリアでは、アングロ・サクソン時代の王族の17の埋葬塚群を上から俯瞰して眺められるようなタワーや、アングロ・サクソン時代の人びとが、王を埋葬するために船をサットン・フーの高台にある現地へ、デベン川からどのようなルートで運んできたのか船の陸の道のりを体感することのできるような展示も予定されている（https://www.nationaltrust.org.uk/sutton-hoo/projects/releasing-the-story-of-sutton-hoo）。

サットン・フーでは、アングロ・サクソン時代とイースト・アングリアという地域文化や北海を中心として形成されていた文化圏にかかわる「モニュメントという文脈」(Williamson 2008)での展示、さらには英国人のナショナル・アイデンティティの変容過程を浮き彫りとするような展示が期待されている。

謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費補助金（課題番号17H02430）による成果の一部である。筆者は、本稿執筆にあたってご協力をいただきました、前 (Former) Regional Director, East of England, National Trust の Dr Ben Cowell (Director General, Historic House Association) に感謝いたします。また Julie、Reuben、Toby にも感謝いたします。

参考文献

Carver, Martin (2017) *The Sutton Hoo Story: Encounters with Early England.* The Boydell Press.
Caton, Peter (2015) *Suffolk Coast Walk.* Matador.
Daniels, Stephen; Cowell, Ben and Veale, Lucy (2015) *Landscapes of the National Trust.* National Trust.
Leyser, Henrietta (2017) *A short history of the Anglo-Saxons.* I. B. Tauris.
Marzinzik, Sonja (2007) *The Sutton Hoo Helmet: British Museum Objects in Focus.* The British Museum Press.
Mitchell, Laurence (2018) *Slow Travel Suffolk: local. Characterful guides to Britain's special places.* Bradt Travel Guides.
National Trust (2002) *National Trust 2002 Handbook.* National Trust.
National Trust (2011) *National Trust Annual Report 2010/11.* National Trust.
National Trust (2014) *Sutton Hoo.* National Trust.
National Trust (2018) *National Trust 2018 Handbook.* National Trust.
Preston, John (2008) *The Dig.* Penguin Books.
Williamson, Tom (2005) *Sandlands: The Suffolk Coast and Heaths.* Windgather Press.
Williamson, Tom (2008) *Sutton Hoo and its Landscape.* Windgather Press.
オッペンハイム，ジャネット（1992）『英国心霊主義の抬頭』工作舎
河村貞枝（2006）「女性参政権運動の展開：選挙権をめぐる階級・ジェンダー・ネイション」、河村貞枝・今井けい編著（2006）『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店
桜井俊彰（2010）『イングランド王国前史：アングロサクソン七王国物語』吉川弘文館
佐藤繭香（2017）『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ』彩流社
橘セツ（2013）「英国農業革命期の文化遺産としてのモデル農場の展示と教育的ツーリズム：東イングランドのウィンポール・ホールとナショナル・トラストの展示・管理をめぐって」『神戸山手大学紀要』第15号（13-28）
橘セツ（2017）「英国人女性画家エブリン・ダンバーの描いた戦時のガーデニングとジェンダーをめぐる文化地理学」『神戸山手大学紀要』第19号（49-68）
西村幸夫・本中眞編（2017）『世界文化遺産の思想』東京大学出版会
マクレガー，ニール（2012）『100のモノが語る世界の歴史２帝国の興亡』筑摩書房
吉見昭徳訳（2018）『古英語叙事詩ベーオウルフ：クレーバー第４版対訳』春風社